

カナダの交響楽

ビクター・フェルドブリル



筆者のフェルドブリル氏は、トロント大学交響楽団の常任指揮者。トロント交響楽団をはじめ、国内外オーケストラの客員指揮者として活躍している。今年四月、文部省の招待で来日し、東京芸大で指揮を指導している。

カナダにおけるオーケストラの歴史は、

およそ八十年前にさかのぼる。そのときケベック市でわが国最初のオーケストラが誕生してから、オーケストラ活動はたちまちモンリオール、トロント、ウイニペグ、カルガリー、エドモントン、バンクーバー、ハリファックスへ広がった。今では、これらの主要都市の外にも、ハミルトン、セント・キャサリンズ、ピクトリア、サンダー・ベイといったところでも本格的な交響楽団ができています、首都オタワにも小規模（四十五人編成）

ながら、オーケストラはある。そのほか、プロとアマの演奏者で混成したオーケストラをもっている村や町も多い。カナダでこれほどオーケストラ活動が盛んなのは、国民の大半が米加国境と接して何千キロも帯のようにのびた地域に住み、町や村が互いに遠く離れているため、娯楽や文化はそれぞれの村や町で自給しなければならぬからである。

私の考えでは、真のカナダ人——すなわち土着のカナダ人——というのは、インディアンとエスキモーしかない。彼らの文化はきわめて豊かなものであるが、われわれがそれを認知し始めたのは、つ

い最近のことに過ぎない。

一般にカナダ文化という場合、英国やヨーロッパ大陸から——そして中にはアジアからも——カナダに移住してきた人々が携えてきたいろいろな影響を指す。これらの移住者たちは、当然ながら、故郷を思い起こさせるような環境を作ろうとした。多くの移民（その中には音楽家も沢山混じっていた）がやってきた第一次大戦および第二次大戦後は、特にその傾向が著しかった。

カナダに移住してきた音楽家は、当初、ダンスなどのための軽音楽をアンサンブルで演奏して生活をたてた。大都市では、大きな映画館で無声映画のためのオーケストラで演奏する音楽家も多かった。これはいい収入にはなったが、音楽的には満足できるものではなかった。

そこでそういう不満を解消するため、この種のオーケストラにいた音楽家の一部が集まって、交響楽を演奏することになった。例えばトロントでは、毎週火曜日の午後五時から、シンフォニー・コンサートが開かれた。コンサートの時間が五時というのは、その時間になると、大きな映画館がすべて長い休憩に入るから

である。彼らがこうしたコンサートを開いたのは、生活費を稼ぐというよりも、

音楽を愛し、自己を研鑽する気持によるものであった。

やがて世界は大恐慌に突入。同じ頃、無声映画の時代も終って、音楽家は仕事がなくなくなった。しかし、この混沌の中から、交響楽団が徐々に息を吹き返す。

カナダでオーケストラやその他の文化活動を政府が財政的に補助するようになったのは、戦後のことである。最初は、大企業の幹部など一部の有力な市民が中心になってオーケストラを組織した。その頃は定まった給料もなく、コンサート回数のに応じて収入を得ていた。生活のために、音楽を教えたり、バンド演奏をしたり、中には不動産や車を売る音楽家もいたほどである。

生活が楽になったのは、一九三〇年代に入ってからラジオが普及し始めてからである。腕のいい音楽家に対する需要がふえ、オーケストラの経営者も肩の荷がおりた。全生活費を支払う心配をしなくても済むようになったからである。一九三〇年代後半から一九六〇年初期にかけて、カナダの主要都市でのオーケストラの契約期

間は、年間二十六週間しかなかった。ところが一九六〇年代になってテレビが普及すると、ラジオ放送はそれに食われてしまった。テレビは、ラジオほど演奏家を必要としなかったため、彼らの収入も大きく落ち込んだ。

これとほとんど時を同じくして、カナダ文化振興会が設立され、音楽や演劇活動にかなりの額が支給されるようになった。その結果、オーケストラの経営に当たってきた人々は、はじめて安心して長期間の演奏を予定し、音楽家の待遇も改善することが可能となった。

それ以来、トロント交響楽団、モンリオール交響楽団などは、一年を通じて演奏し、かつメンバーにはまあまああの報酬が払えるようになった。バンクーバーやウイニペグの交響楽団でも、その方向に移行しつつある。一九六〇年代にラジオが音楽番組の放送を削ってしまったが、カナダ文化振興会が設立されたおかげで、交響楽団は再び栄えたわけである。またこの文化振興会の設立により、州政府や市役所でも芸術振興会を作り、それぞれの地域で芸術振興を後援する空気が高まった。

オーケストラの育成と同時に、聴衆や独奏家、指揮者、作曲家の育成も必要である。これはかなりむずかしい。というのは、カナダ人というのは才能ある芸術家がいても、他の国で認められるまで認めようとしなからである。そのいい例がトロント生まれの大ピアニスト、グレイン・グールドだ。彼はニューヨークで開いたコンサートで批評家から絶賛を浴びたが、そのときまでトロントの聴衆は大